北茨城民報

日本共産党
北茨城市委員会
磯原町豊田1030−2

毎週 日曜日 発行

インターネットでもご覧いただけます。
http://ktib.geo.jp/jcp

ご相談はお気軽に

市議会議員
福田　明
43−0468

市議会議員
鈴木やす子
42−2462

後期高齢医療制度

低所得者の保険料免除を

日本共産党市議団が申し入れ

日本共産党市議団は、5月22日、後期高齢者医療制度において、年金が月1万5千円未満の低所得者の保険料免除を求める要望書を市長宛に出しました。

今年2月、県の広域連合議会において日本共産党は同様の提案をしました。否決はされましたが、その後も、制度への怒り・批判が大きく広がっています。

茨城県医師会が撤廃を求めて署名運動をすすめており、茨城県市議会議長会も「新たな減免制度を創設する」要望決議を採択し、関係機関に送付しました。

さらに、4月28日に開かれた県広域連合の議運が市町村に減免制度を働きかけることを決め、また広域連合としても独自の減免制度を検討するとしています。

そうした動きもふまえ、改めて市として、広域連合に免除を働きかけることを要望しました。

要望事項

1、年金が月1万5000円未満の高齢者の保険料は全額免除するよう北茨城市として茨城県後期高齢者医療広域連合に働きかけること。
2、北茨城市が実施している人間ドック(総合健診)の補助制度は75歳以上でも対象とすること。
3、65歳から74歳の障害者で後期高齢者医療制度に加入しない場合でも、障害者医療福祉費制度(マル福制度)を適用すること。

復旧工事

中郷町小野矢指地区の護岸復旧の工事現場を、福田明、鈴木やす子両議が視察しました。予想以上に激しい砂の流失に直面しながら工事がおこなわれています。

さらに、その北側の海岸線で新たな浸食もすすんで、付近の市民から不安の声が寄せられています。

海岸浸食

小中学校の学級が確定

5月1日付けで、小・中学校の学級が確定しました(下表)。年々減少傾向にあり、学級数が減ってきています。

冨士ヶ丘小学校では、新入学が4人で、2年生との複式学級となりました。

1クラスの人数は左表のとおりで、中学校では、4分の3が31人以上です。学校単位で講師の加配やチーム・ティーチングで対応していますが、国の制度として40人規模が変わらないため、非常勤講師や臨時採用の先生が減らないのが現状です。

「不安定雇用」の弊害が叫ばれていますが、これから育つ子どもたちの教育の場にあって、この雇用形態は率先して減らしていかなくてはいけないのではないでしょうか。学級定員の少人数化を進め、正規雇用で安定した教育環境をつくることは国や自治体の責務です。

1クラスの人数

1クラス	小学	中学
～30人	73	10
31～35人	22	10
36人～	9	24

児童・生徒数（カッコ内は新入生）

小学校	2687人(419)、104学級
中学校	1488人(505)、 44学級

議員バッジ

北茨城市議会議員　福田　明

私は、洒落っ気がまったくないほうである。子どもの頃は、買ったばかりの靴で登校するのが気恥ずかしく、一度泥を付けてからでないと履いて行けなかった。そうした性分は今も変わらず、「明ちゃんは、もう少し格好を気にしたら」と皆に良く言われる。

今月、野球帽と黒のサングラス姿でいわき方面をドライブし、平の松ヶ丘公園に立寄った。すると駐車場の警備員が飛んできて、「馬券を買いに行く人は、ここに止めてはダメです。あなた公園など行かないでしょう」と、私の顔を見るなり言ってきた。「いや、公園のつつじを見にきたのです」と必死に応えたが、実際には信用されなかったようである。公園の帰り際にその警備員にあいさつしたが、さすがに罰が悪そうであった。

その話を帰って妻にしたら「人を見かけで判断するとは許せない」と、かんかんに怒っていたが、私はなぜか、今も昔も「人は見かけで判断されるもの」と笑わざるを得なかった。そういえば以前、私が「議員バッジ」を付けて行くと、相手方が恐縮がる感じを幾度となく受けたことがある。それが私は嫌いであった。そんな中、数年前に東京の小金井市に視察に行った時「うちの議会で議員バッジを付けてくる議員は誰もいない。バッジを付けて権威がるのは日本だけ」と聞かされた。それ以来、私自身は一度も議員バッジを背広に付けた記憶はない。

しかし最近、自分だけの妙なこだわりだけで粋がっていいのだろうかと自問する。議員バッジは支持者みんなの支援の結晶である。そう思うと、議員バッジは権威の象徴ではなく「市民につくす」という議員本来の初心を呼び覚ます宝のように思えるから不思議である。50才を過ぎれば「柳に風」、たまには背広に議員バッジを光らせて、市民の護民官として奔走したいと夢見ている。

水戸に住む保育園に通う孫は、妻に買ってもらったばかりの大好きな漫画入り靴を自慢げに履いていくという。時代はまさに隔世の感がする。